

オリヴィエをめぐる冒険

小 田 涼

オリヴィエ・ビルマン (Olivier Birmann) さんについて、私が知っていることを書いてみようと思う。

オリヴィエは (私はいつもオリヴィエと呼ぶのでここでもそうしたい) 1949年1月12日パリ生まれ。実は村上春樹とまったく同じ生年月日であることが本人は嫌ではないらしい (偶然にも二人は無類の猫好きである)。ソルボンヌで文学と哲学を勉強し、ルネ・シャールについて修士論文を書く。その後、5月革命の余熱さめやらぬなかヴァンセンヌに創設されたパリ第8大学でジル・ドゥルーズの講義を、ソルボンヌでアンリ・ピローの講義を聴講する。アルバイトをしながらの学生生活である。パリのINALCOで日本語の夜間授業を受けるものの、2年目はストライキなどで授業がほとんどなかったため、最初の日本語学習は1年ほど。それでも、INALCOではジャン＝ジャック・オリガスや二宮正之といった伝説的な教授陣に習ったらしい。

初めての日本滞在は1975年末から1976年のことである。まずパリからヒッチハイクをしながら陸路で大陸を横断する。このとき、デン・ハーグでフェルメールの『デルフトの眺望』と初めて対面したのが忘れられない思い出とか。ブルーストが友人への手紙で「世界で最も美しい絵」と評したこの絵の複製は学校の教科書などで何度も見ていたそうだが、実物を前にしてその空と光に啓示を受けたという (確かに、絵が実際に描かれたオランダの地でこの絵を鑑賞するのは感慨深いものである)。さらにヒッチハイクでコペンハーゲン、ストックホルム、そしてヘルシンキからレニングラード (とオリヴィエは言うが、もちろん現在のサンクトペテルブルク) に向かい、その後モスクワからシベリア鉄道で東へ。マイナス36度の雪のなか、寒さに震えながら (しかし幸せを

嘯みしめながら)最後は船に乗って横浜に着き、次いで東京に来る。これが1975年12月のこと。10日ほど宿をとって東京で過ごした後、各駅停車の列車に乗って京都にたどり着き、そのまま京都およびその周辺で何年かを過ごすことになる(東京に戻るつもりで宿に残してきた荷物を取りに行くことはなかった)。旅の資金が尽きたころ、運良くフランス語の家庭教師の仕事を見つける。折しも日本ではフランス語学習熱が高まりを見せていたので、フランス語講師の仕事がいくつかあり(後にアリアンス・フランセーズでも教えるようになる)、生活にはそれほど困らなくなる。同時に日本語学校にも通って本格的に日本語を勉強し始め、手当たり次第に日本の近現代の小説を読む。大阪の街や庶民の暮らしを描いた織田作之助を知ったのもこの頃である。しかしいったんフランスに帰国し、しばらくホテルで働きながら勉強して日本政府の給費留学生試験を受け、1983年に合格、再び日本へ。日本文学を勉強しようと大阪大学に来てみたら、所属することになったのはなんと日本語学の講座であった。これも何かの縁とそこで社会言語学や方言学を学び、寺村秀夫先生の指導のもと、日本語の間接話法について修士論文を書く。並行して漱石や井伏鱒二などの日本文学を読みあさる。ほどなくして中井珠子先生の紹介で曾我祐典先生や中川努先生と知り合い、阪大で勉強するかたわら関学でフランス語を教えるようになり、さらにフランス語学も勉強し始める。かくして、もともと文学好きの青年が、言語学の知識と分析手法も身につけてしまったのである。1991年に桃山学院大学に着任、そして1996年に関西学院大学文学部に着任、以後フランス語学の演習やフランス語の作文の授業、そしてフランス文学の授業などを担当することになる。

オリヴィエの人生は小説にでも書いてもらいたい人生だと思うのだが、本人は自伝や小説を書くことには興味が無いようである。しかし詩は書いているらしく、少しだけ見せてもらったこともあるのだが、本人の了承が得られなかったのでここには掲載しない。

私がオリヴィエと知り合ったのは2006年の春のことで、それほど長い知り合いではないのだが、もっとずっと昔から知っているような気がする。言語学

者の常で、親切なフランス人を見るとついフランス語のインフォーマント調査をお願いしてしまうのだが、オリヴィエはいつも辛抱強く私の質問につきあってくれる。最初は神戸屋でコーヒーを飲みながら、そしてオリヴィエはタバコを吸いながらの調査だったが、私がタバコの煙を嫌うのを知ってから私の前では吸わないように気をつけてくれている（断っておくが、私はタバコは嫌いだがスモーカーが嫌いなわけではない）。オリヴィエほどフランス語の語感の鋭いネイティブ・スピーカーには会ったことがない。関学に赴任して20年、多くの学部生・院生・教員がオリヴィエにフランス語のインフォーマント調査をして卒論や修論、そして博士論文や学術論文を完成させていった。特に卒論や修論の執筆が佳境に入る秋学期には、授業日の休み時間・空き時間だけでなく土曜・日曜・祝日も質問に来る学生がいるのだが、オリヴィエはいつもころよく時間を割いて質問に答えてくれる。常に穏やかで、めったに怒ることはなく、強さと優しさ、ユーモアと繊細さを持ち合わせている。なぜそんなに強くて優しいのとオリヴィエに聞いたことはないが、聞いたらこう答えてくれるといいなと思っている。“If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.”

(文学部教授)